

## 2015年度 白梅学園大学大学院博士課程 学位審査報告書

学籍番号： B2H001

氏名： 天野美和子

学位の種類： 博士（子ども学）

学位論文題目： 中学生との“ふれ合い体験活動”における幼児の経験

論文審査委員： （主査） 小林美由紀  
（副査） 無藤 隆  
（副査） 福丸 由佳  
（副査） 倉持 清美

### 1. 論文内容の要旨

#### I. 研究の目的

保育や教育の現場では、中・高校生が幼児とふれ合うための様々な取り組みが行われている。その一つに中学生が保育所や幼稚園を訪れて幼児とふれ合う体験活動があり、その実施には中学校側の家庭科や総合的学習の時間、特別活動との関わりがある。本研究ではこれらの活動を総称して“ふれ合い体験活動”と呼ぶ。

本研究では、中学生の職場体験として行われた“ふれ合い体験活動”を研究対象とし、園という限られた環境の中で行われる数日間の体験活動における幼児の行動から、そこで幼児の経験を見出し、幼児にとって中学生がどのような人的環境になっているのかについて論じる。そして、中学生側にとっての効果を強調する傾向に偏りやすい“ふれ合い体験活動”において、幼児側にとっての活動の意義を明確に示すことで、園と中学校が協働して行う“ふれ合い体験活動”を両者にとってより互恵的な活動にするための示唆を与えることを目的とする。

#### II. 論文の概要

第1章では、戦時中から今日に至るまでの乳幼児との関わりを取り入れた学習の位置づけについて、それを学校教育の中で主に担ってきた家庭科教育の変遷および、近年の社会問題である少子化対策に関連する施策の動向に沿ってまとめた。それにより、それぞれの時代の背景によって、特に学校での教育においては社会から要請される交流活動の意味が違っていることが示唆された。

また、幼児と中学生との“ふれ合い体験活動”の現状および、中学校における家庭科、

総合的学習の時間、特別活動の3つの教科における活動の位置づけ、および、幼稚園、保育所、幼保連携型認定こども園における位置づけについての整理を行った。それにより、幼稚園、保育所、幼保連携型認定こども園における幼児にとっての中学生とのふれ合い体験活動の目的はいずれも共通している一方で、中学生側にとっての目的は、中学校の教科間での共通点もみられるが、教科等ごとの目的の違いも存在していることも示唆された。

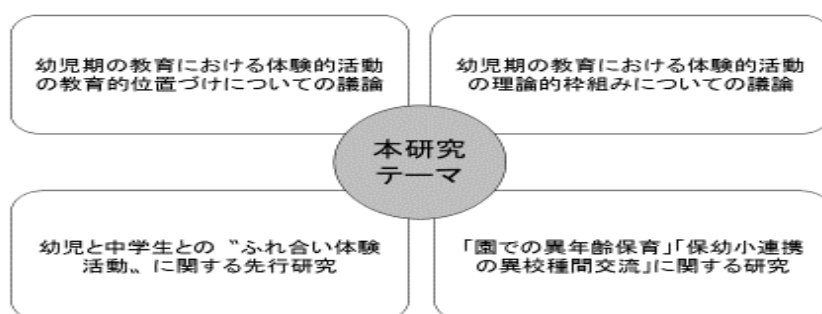
第2章では、本研究の理論的枠組みと視点を示すために、第一に、我が国の学校での教育の中でも、幼児期の教育における体験活動の位置づけと意義について検討した。それにより、体験活動は幼児が園の環境の中で遊びを通して、社会に存在する身近で多様な人や物と出会い、関わるための機会として位置づけられ、そこでの体験を通して何かを感じたり気づいたりして、さらに考えるということの根幹となる部分を刺激して促進させるという意義があることを示した。

第二に、そのような体験を通しての学びや、環境を通じた保育、すなわち生活の中で様々な特性をもつ人や物と実際に出会い関わることによって幼児が何かを感じたり、気づいたり、考えたりするその経験によって知識を得るという学び方は、なぜ、幼児期の子どもにとって重要なのであろうかという点を明らかにするために、ジョン・デューイの幼児教育の理論を参照することによって示唆を得た。

そして、幼児期の子どもにとっての体験を通じた学びの重要性を整理すると次のようになる。未成熟ながらも周囲の物ごとを柔軟に受け止め働きかけていく能力のある幼児期の子どもが、これまでの経験を基に、これからの経験を関連づけて、生きていくうえで役に立つ経験に発展させていくには思考する力が欠かせない。幼児期の子どもが思考できるようになるためには、まず、物ごとを言葉で言い表すことが出来るようになる必要がある。まずは体験的な活動を通して幼児の主観的な感情に直接働きかけ、その体験を言葉で表現することの習慣を身につけることの必要性について示した。

第3章では、本研究に関連する先行研究や文献の概観をまとめた。本研究のテーマに関連する研究の分野は次の図に示す通りである。

### 本研究のテーマに関連する文献の概観



先行研究については、第一に、中学（高校）生に焦点があてられた研究と幼児側に焦点があてられた研究という視点からの整理として、(1)中学（高校）生側に焦点が当てられた研究 (2)欧米における「親になることの教育」との関連 (3)幼児側に焦点が当てられた研究、第二に、様々な異年齢交流との対比として、(1)異年齢交流と異校種間交流について (2)

「保幼小連携」という視点からの異年齢・異校種間交流と意義について (3)園で使われる「異年齢保育」という用語について (4)園の「異年齢保育」という視点からの異年齢交流の意義について (5)幼児と中学生との「ふれ合い体験活動」との共通点や違い、について論じた。

これらの整理を通して「ふれ合い体験活動」を狭い意味で捉えた場合、中学生側に焦点があてられた研究と、中・高校生側に焦点があてられた研究という側面からの検討となるが、さらに広く捉えた場合、異年齢保育を含む異年齢交流、異校種間交流、さらには、次世代育成に関わる親教育の領域にも関連していることが示唆された。

第4章、第5章、第6章では、中学生の職場体験による「ふれ合い体験活動」、場面の観察からの研究(研究1から研究3)について、第7章では、園の保育者へのインタビューによる研究(研究4)について議論した。第4章の研究1では、幼児は園生活の様々な場面で中学生とどのようにふれ合い、そこからそのような経験をしているのかについて検討した。第5章の研究2では、幼児は中学生と、園生活のどの活動場面でふれ合い、その場がどのような経験の場になり得るのかについて検討した。第6章の研究3では、各幼児が中学生とふれ合う頻度と関わり方、および、幼児にとっての中学生の人的環境について検討した。第7章の研究4では、担任保育者の「ふれ合い体験活動」の捉え方をインタビューの回答から検討した。研究1から研究4の概要は以下に示す通りである。

#### 研究1から研究4についての概要

##### 研究1：中学生との「ふれ合い体験活動」における幼児のふれ合い行動の分析

研究協力園 5園で行われた中学生の職場体験による「ふれ合い体験活動」を研究の対象とした。幼児と中学生との遊び場面だけではなく、食事や着替え等の園でのさまざまな生活場面も含めたふれ合いを観察し、それらの場面で幼児は中学生とどのようなふれ合い行動を生起させているかを明らかにし、そして、幼児がそこからどのような経験をしているのかについて検討した。

その結果、幼児のふれ合い行動を表す6つの上位カテゴリー(例:「中学生に対して好意的な感情をもつ経験」、「中学生との関わり難さの経験」など)が生成された。幼児にとって中学生は、発展した活動に導いてくれる等、頼りになり、また興味・関心の対象でもある等、好意的な存在である一方で、構ってもらえない等、必ずしもいつも幼児の思い通りになるわけではなく、時には我慢したり、諦めたりして自己の感情を調整して折り合いをつけていることも示唆され、年上の中学生に対して関わり方の難しさも経験していることが示唆された。

##### 研究2：幼児は園生活のどのような場面で中学生とふれ合っているのかについての分析

本研究は、研究1と同様の5園における中学生の職場体験の観察によるエピソードを基にした研究である。幼児らが生活する園環境で実施された中学生とのふれ合い体験活動を観察し、普段は園と学校という異なった環境で生活している年齢差の大きい幼児と中学生が、園生活のどの活動場面で、どのようなふれ合いをしているのかについてエピソードとして記述し、それを基に分析し、中学生と共に過ごす園生活の様々な場面が幼児にとってどのような経験の場になり得るのかについて検討した。その結果は以下に示す通りであった。園生活を「自由な活動の場面」「一斉的な活動の場面」「基本的生活の場面」「場面と場面の間」の4つの場面から分析したところ、各場面において中学生は幼児にとって普段は

いない特別な存在で、また、先生や幼児仲間とは違った関わり方をしてくれる人でもあり、日常とは違う雰囲気をもたらしてくれる存在となっていることが分かった。

### 研究3：各幼児が中学生とふれ合う頻度とふれ合い方からの分析—3 事例の検討

研究協力園 3 園で実施された 3 事例の幼児と中学生との「ふれ合い体験活動」の場面を観察し、その数日間の「ふれ合い体験」期間中にクラスに配属された 1 名の中学生とクラスの各幼児がどの程度の頻度でふれ合っているのか、および、どのようなふれ合いが生じているのかについて検討した。

その結果、いずれの園においても、中学生と関わり合う頻度が他児に比べて目立って多い幼児がいることと、保育者が設定した場面以外には関わり合いが見られない幼児がいるということが見出され、ふれ合い体験活動において幼児のふれ合いの頻度には偏りがあることが示唆された。

### 研究4：保育者は「ふれ合い体験活動」をどのように捉えているのか—保育者へのインタビューより—

研究協力園 4 園において、筆者自身が観察した際のクラスの担当保育者 6 名（複数担任の場合あり）を対象として、その保育者らが中学生との「ふれ合い体験活動」をどのように捉えているのかについて問う半構造化した 7 つの項目についてのインタビュー調査を行った。そして、その回答を類似内容ごとにカテゴリー分類し、筆者の観察によって見出した幼児と中学生とのふれ合いについてのカテゴリーとの比較を行い、保育の実践者である保育者と、観察者である筆者との捉え方の相違点や共通点について検討した。

その結果、保育者の回答の内容から得られたカテゴリーと、筆者の観察によるカテゴリーは、おおむね共通していたが、「幼児についての行動とそこでの経験」について問う質問については、保育者インタビューの回答には現れなかった内容としては「中学生に対してわざとふざけたり、からかったりしている」「中学生に反抗的な態度」などのカテゴリーに該当するものであった。しかし、観察場面においては幼児が中学生に反抗的な行動をとる場面も複数回観察されているため、保育者は、幼児の反抗的な態度や言動で現れる反応を目にしていると推測される。おそらく、これらの行動や経験は「ふれ合い」の対象である中学生との関係性のなかで「経験されること」という捉え方には結びつかなかった可能性が示唆された。

また、中学生を受け入れる担当保育者の配慮としては、安全面の配慮を最重要としながらも、安全にさえ配慮すれば、あとは出来るだけ中学生に幼児と自由に関わってもらい、多くを経験してもらえるように配慮したいという傾向が見られた。これらの結果から、幼児側にはケガをしないようにするなどの安全への配慮が主となり、中学生側には幼児とふれ合うことによる学びや経験への配慮が主となっていることが示唆された。

## III. 総合的考察

本研究において見出されたことは以下の通りである。

第一に、幼児にとって「ふれ合い体験活動」でふれ合う中学生は、いつもの幼児仲間だけでは発展しないような遊び方に導いてくれるなど好意的な存在である一方で、保育者のような頼れる大人ではないこともあり必ずしもいつも幼児にとって心地よばかりの存在ではなく、時には我慢したり、諦めたりして自分の感情に折り合いをつけなければならない経験もしていることが見出された。

第二に、幼児と中学生とのふれ合い行動は、保育者が主導となって行う一斉的な活動の場面よりも、各幼児が自由に好きなことをして遊ぶ場面や、活動の目的が明確ではない待ち時間や場所の移動場面というような「場面と場面の間」において多く生起していることが見出され、幼児の活動において保育者の介入が少なく、自由度の高い場面において幼児と中学生とが関わる傾向にあることが示唆された。

第三に、園に中学生が来ることにより、園という閉ざされた環境の中に一時的に外部の雰囲気を持ち込まれることになる。これは園での幼児の日常生活に意外性をもたらす。また、中学生は保育者のような指導をする立場の大人でもないが、普段遊んでいる幼児仲間でもない。ふれ合い体験において幼児は、普段は街中ですれ違う程度で関わることはない中学生と園の中で出会い、実際に身近での会話や、身体接触の経験をするようになる。これは、少子化により年齢差のある子どもたちが交流する機会が少なくなった地域や、園での指導的立場にある保育者や、年齢差の小さい幼児仲間とのやりとりとは違った経験ができる機会となっていることが見出された。

第四に、3つの園の事例において、幼児一人一人の中学生と関わり合う頻度について分析した結果、中学生とふれ合う頻度が他児に比べて目立って多い幼児が少数見られたことと、その一方で、保育者が設定した場面以外には中学生との関わり合いが見られない幼児がいたという二つの点が、いずれの園においても見られた。したがって、ふれ合い体験活動において幼児が中学生とふれ合う頻度には偏りがあることが示唆された。

第五に、保育者へのインタビューから、中学生を受け入れる担当保育者としては、安全面の配慮を最重要としながらも、安全にさえ配慮すれば、あとは出来るだけ中学生に幼児と自由に関わってもらい、多くを経験してもらえるように配慮したいという傾向が見られた。これらの結果から、幼児側にはケガをしないようにするなどの安全への配慮が主となり、一方の中学生側には幼児とふれ合うことによる中学生の学びや経験への配慮が主となっていることが示唆された。

## まとめ

中学生は発達的にまだ未成熟な年代でもあるため大人ほどの経験知はまだ身につけていない。それが幼児と関わる時にも行動の一部として現れる。しかし、そのような不器用さは中学生特有のものであり、幼児への関わり方や配慮の行き届いた大人との違いであり、幼児が関わる多様な人的環境としての意味のある存在であると考えられる。

ただし、そこには園で交流を見守る保育者の教育的な計画と、実際の活動場面に目を行き届かせることが必須であり、幼児の冒険的で幼児によって多様な体験のフォローにより、幼児の次の経験に発展させることが必要である。これが、学校の教育における「ふれ合い体験活動」の特徴であり、地域や家庭における一般的なふれ合い体験との大きな違いであると考えられる。

## 2. 論文審査の結果の要旨

本論文は、中学生の保育所における幼児との触れ合い体験活動を幼児の側からどういう経験となるかを観察し、その主要な特徴を記述したものである。従来の研究は主に中学生側にとっての意義を取り出していたのに対して、ほとんど検討がなされていない幼児側の経験を取り上げ、いくつもの観察研究を重ね、幼児にとっての活動の経験的意義を分類・記述することに成功した。その経験について場面や活動の種類に応じた分類を行い、その多様性を類別し、さらに子どもの活動の特徴を取り出した。さらに、保育所保育士にとって必ずしもその経験のありようが明確にされていないこともインタビューにより見いだしている。中学生は同じ年齢の仲間でもなく、保育者のような大人でもない、中間の存在であり、しかも初対面で親しくなっていく過程にある。そういった出会いが、幼児にとって保育所の通常の活動には見られない新たな人間関係の経験を可能にしていると見える。

第1回目の論文審査会は、2015年12月8日18時より開かれた。幼児の側から中学生の「触れ合い体験活動」を捉えた独自性のある意義深い研究であり、研究としての形もまともだと評価された。しかし、カテゴリーが記述的で、ボトムアップである良さもある反面、次元の基準が曖昧であり、時に分類に疑問があることから、その妥当性・信頼性をもっと明確に示すこととともに、抽象的に大きくくりの類型としてまとめたらどうかと示唆された。その他の記載の不明点等が指摘され、修正をすることが求められた。

第2回目の口述審査会は、2016年1月14日18時30分より開かれた。カテゴリーの分類の仕組みになお不明点が見られることや、目的や考察について記述が不足していることが指摘された。とはいえ、子どもからの視点から具体的で様々な関わり方をしていることを明確にした点で意義が高いとされた。

第3回の公開審査会は、2016年2月12日18時30分より行われた。修正を組み込んで発表が行われ、研究の独自性が高く評価された。質疑についても適切な解答がなされた。最終試験では学力の確認を含め、それまでの修正が適切になされたことを認めると共に、誤字などの修正が求められ、それは指導教員に一任された。その修正がなされることとして、博士論文として合格とされた。